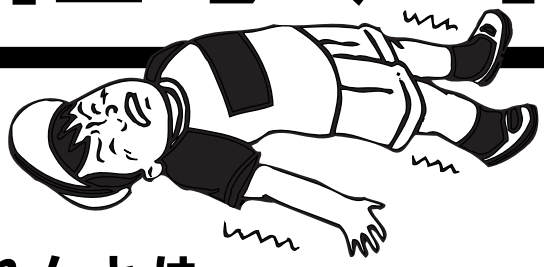
読むくすり箱
第130号
平成14年9月
富山県病院薬剤師会
DI委員会

# 熱性けいれん



## 1 熱性けいれんとは

急な38℃以上の発熱に伴って起きるごく短時間（通常1～2分、長くても10分程度）のけいれんです。日本では5～8%の子供が起こします。決して珍しくありません。けいれん自体で命にかかわることは通常ありません。多くの場合、くせになったり、障害を残すことはありません。てんかんとは異なります。熱性けいれんは生後6ヶ月～6歳ぐらいまでの子供の病気です。

## 2 熱性けいれんの症状

- □ 意識なく、1点を見つめたり、白目をむく
- □ 全身が硬くなったり、手足がガクガクする
- □ 呼吸が止まりくちびるが紫色になる
- □ 歯をかみしめる
- □ 吐く、よだれをたらす、尿や便をもらすことがある

これらの症状はほとんど平均2～3分で自然に止まります。
ほとんどの場合、翌日には元気を取り戻します。

## 3 けいれんを起こしたら

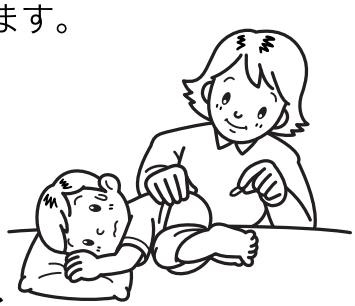
- □ まずはあわてず、安静にする（大声を出さない、抱っこをしない、体をゆすらない）
- □ 口に物を入れない、水などを飲ませない
  （舌をかんで死ぬことはないので強引に口に物を入れたり、こじ開けたりしてはいけません）
- □ 顔や体を横向きにして寝かせ、衣類をゆるめて楽にしてあげる
- □ 発作の様子をメモする（子供の体の動き、ひきつけを起こしている時間を見る）
- □ 発作がおさまったら体温を測り、首の下にタオルなどをあてる
  （気道を広げ空気の通りを良くする）
- □ 子供のそばを離れてはいけない

## 4 こんな時は直ちに診察を受けましょう

- □ けいれんが10分以上続く時
- □ 短い時間に繰り返し発作が起こり、この間に意識がしっかりしない時
- □ 体の一部だけが強いけいれんを起こしている時
- □ けいれん後に手足の動きが悪い時（麻痺がある）

## 5 けいれん止めの薬

ふつう熱性けいれんを1～2回起こしても特に治療を必要としません。
以下の場合は発熱時にけいれん止めの坐薬で予防します。



- □ 熱性けいれんを起こす前から発達に遅れがある
- □ けいれんの時間が長い
- □ 発作が体の一部に起こる
- □ 発作の回数が多い
- □ 脳波に異常がある
- □ 両親や同胞が熱性けいれんを起こしたことがある

けいれん止めの坐薬使用後は眠くなったり、足元がふらつく場合があるのでなるべく寝かせておきましょう。

## 6 解熱剤はいつ使えばいいの

解熱剤で熱性けいれんの発症を予防することはできません。あまり急な熱の上げ下げをしないために解熱剤の使用は必要最小限にしましょう。

- □ 熱が38.5℃以上ある時、まずは水分を与え、脇の下や首筋を冷やし、様子を見る。それでも熱が下がらなくて子供がしんどそうにしている時は解熱剤を使いましょう。
- □ けいれん止めの坐薬を使用した場合は30分以上あけてから解熱剤を使いましょう。